



市指定有形文化財（絵画）

- ・名 称 大威徳明王像絵額
(だいゐとくみょうおうぞうえがく)
小田野直武 筆
- ・指定年月日 昭和56年3月24日
- ・所 有 者 大威徳神社別当 花脇栄一
- ・製 作 年 明和2年(1765)
(明王図背面に「めいわにきのとどりとし明和二乙酉年さんがつひはなそのうえむら三月日華園上村、大威徳山だゐいとくさんふん忿怒明王」の墨書きがある。)

大威徳神社(角館町蘭田)に奉納された絵馬板であり、この地域では古い献額といえる。この絵馬は、大威徳神社のご神体の仏像が何者かに盗まれたため、お祭りができなくなることから、その本尊代用として描かれたものである。

1997年秋田県立近代美術館発行の「東北の

洋風画」の中で、絵の解説を下記のように評している。

大威徳明王が、疾走する牛の背に立ち乗って弓矢を射るようにしている動的な仏画であるが、手本に拠って描いたとしても17歳の時にこれほど力が入った仏画を描けたということにまずは驚かざるを得ない。次に落款の語尾に「謹拝書」とあることに関心する。

額の寄進者が皎寛という僧侶であることやこの明王図が大威徳山という信仰を集めた一山寺院の本尊であることから謹拝書の表現はごくあたりまえのことだが、17歳の直武がたとえ制作時に教示されて記したとしても、余技で描いていた下級武士のなせることではないであろう。奉納の絵額にしても本尊とされる図像に筆者の署名が許されること自体異例で、佐竹北家家中の間でも一般の角館近隣の間でも相当に絵師としての認識度が高く、身分的には役職名はなかったとしても大手をふって絵を描ける境遇にいたと推量されるのである。

というように、この明王図からも直武の特異な才能が17歳という若者時代に既に評価されていたことがうかがえるのではないかと。また、そのことが「平賀源内」との運命的な出会いを生み、秋田蘭画という新たな西洋画法を創出していくことになるなど、時代を駆け抜ける直武のパワーがこの「明王と疾走する牛の激しさ」に映し出されているような気がする。

今年は、大威徳神社12年に1度のお祭りが行われる年です。ご本尊のご開帳は8月14日から20日まで、山宮神社拝殿で行われる予定です。